キャンプを体験した子どもの好奇心に関する研究

岸　勇介　（生涯スポーツ学科　野外スポーツコース）
指導教員　林　綾子

キーワード：キャンプ，好奇心，子ども

１．序論

近年，急激な社会変化によって，自然の中での直接体験が減り，子ども達の目の輝きが薄れてきていると言われている．子どもの成長に大切だと考えるトップ３の中に“好奇心”が挙げられている（上条，2011）．この「好奇心」は子ども達が素直に気になり追求する，学習をする内発的動機付けにつながる重要なものだ．子どもの時に自然の中でさまざまな経験をさせる事が好奇心を刺激し子どもの成長には重要である（藤崎，2011）．そこで，本研究ではキャンプを体験した子ども達が好奇心を示した状況を明らかにし，分析することからその特徴や要因との関連性を明らかにすることを目的とする．

２．研究方法

【研究対象】

平成 24 年 8 月 22 日から 8 月 24 日の 2 泊 3 日の「2012 年サマーキャンプ　集まれ！！友達いっぱい！！～一人ひとりが主人公キャンプ～」に参加した，O スポーツアカデミー所属の小，中学生 13 名のうち小学生 11 名を対象とした．

【研究方法】

本研究では、子どもエスノグラフィーの技法により、多角的にデータを収集した．実際には，保護者へのアンケート（保護者 9 名に対して子ども 11 名分），スタッフによる観察データ収集（9 名により 86 例），子ども達によるふりかえりシートを用いた記述データ収集（11 名×3 日分）を行い，分析には質的研究方法の一つである修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に子どもが好奇心を示した状況について分析を行った．

３．結果と考察

１）個人特性との関係からの分析

観察調査により，子ども達の好奇心は，キャンプ始め，新たな環境の中で，幅広く情報を求める拡散的好奇心を発揮したが，時間の経過と共に明確な好奇心を持ち，1 つのことを追及する特殊的好奇心へと移り変わっていくことが明らかとなった．どちらの好奇心もキャンプ体験中は普段より高まっていた事が観察された．

また，好奇心を持った時に，男の子は，すぐに自分で行動する傾向が観察され，女の子は，伝達，質問など，他者と共有する傾向が見られた．成長の差に着目すると，低学年児童は，主に拡散的好奇心を示し，見る，触るなど知覚的な行動パターンが多く，高学年児童は，個々がより特殊的好奇心を示し，それぞれが，観察，質問するという知的な行動パターンが多いということが明らかになった．

２）好奇心を示した対象・種類・行動の関係について

本研究のキャンプにおける，子ども達の好奇心についての調査結果を概念図としてまとめた（図 1）．キャンプ体験には，【自然の物，自然現象，自然の中での遊び】といった子ども達の好奇心の種となるものが多く含まれている．子どもの興味を引き付ける自然体験の要素が，まず子ども達の知覚的好奇心を刺激し，また，仲間との協力や冒険的な要素が，“やってみたい”など，子ども達の素直な気持ちを引き起こし，【探索，伝達，創作，挑戦，楽しさの追求】といった行動をとらせた．【探索，伝達，創作】といった行動は，特に子ども達の知的好奇心を刺激し，【楽しさの追求，挑戦，創作】といった行動は，特に行動的好奇心を刺激した．仲間と共有やスタッフの言葉がけなどといった要因により，好奇心はさらに刺激され，素直に気になり追求する“内発的動機付け”へと変わっていく．個人の純粋な好奇心の満足を求めて追求する子ども達の姿はイキイキし，目がキラキラと輝き，自主的に自らの課題に挑戦していく．そこから，自主性や創造性が養われていくことが明らかになった．

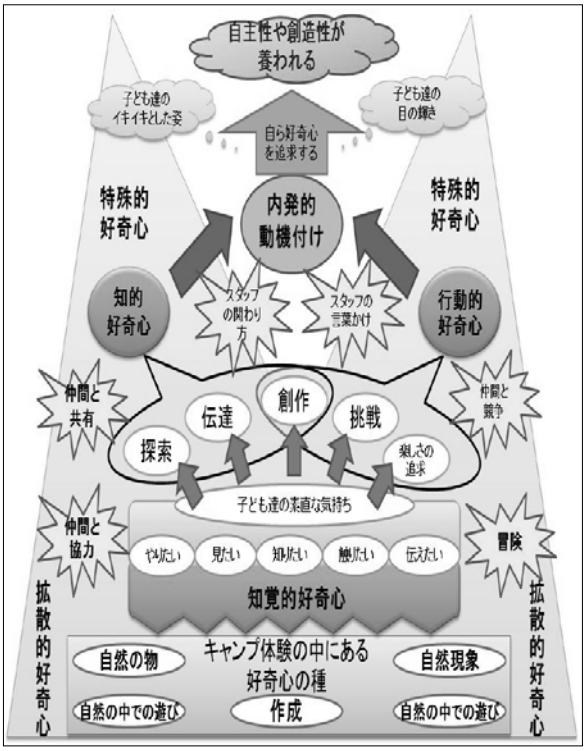

図１．キャンプ体験中の子ども達の好奇心についての概念図

４．まとめ

本研究において，キャンプを体験した子ども達の好奇心について，キャンプ体験の中にある好奇心の種や，好奇心を抱く対象や好奇心の種類，好奇心に対する行動パターンや，好奇心の種類の移り変わりから内発的動機付けに繋がる過程が明らかになった．今後，より効果的な指導を行うためには，指導者のより深い好奇心についての理解から，子ども達の特性や好奇心の深まりの段階をふまえたプログラミングや関わり方を検討する必要がある．

５．引用文献

１）上条春夫（2011）子どもの好奇心 - 現状とその背景．児童心理 65（10）：pp14 - 20.
２）藤崎眞知代（2011）好奇心はどのように発達するか．児童心理 65（10）：pp28 - 33.